OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ふたたびフランス語の隠喩性について
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 34-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97331
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ふたたびフランス語の隠喩性について

春木仁孝

1. はじめに

筆者はこれまでに春木(2017, 2021)などにおいて、物の命名法やオノマトペの用いられ方、あるいは様態を動詞の中に取り込んで表現する点などを取り上げて、フランス語が隠喩的であることを指摘してきた。このフランス語の隠喩的な性格を論じるにあたっては、フランス語に比べてむしろ直喩的であることが多い日本語と対比するという形を取ることで、この二つの言語には対蹠的な点があることを指摘してきた。しかし、春木(2017) においては紙幅の関係もあり、物の命名の場合だけではなく、そこで取り上げられている様々な現象全体を通して、直喩的である日本語に比べてフランス語が隠喩的であるという主張の説明が十分に展開しきれなかった。本稿では春木(2017)を補足しつつ、様々な現象においてフランス語が隠喩的であるという筆者の考えをより詳しく説明したい。

先ず、隠喩的、直喩的という言葉の意味を確認しておこう。一般に、直喩というのはソースドメインの表現とターゲットドメインの表現を「〜のような、〜のように」のような類似性を明示する表現や手段でつなぐ表現方法のことであり、一方、隠喩というのはそのようなつなぎの表現を用いないで、より直接的にソースドメインの表現でターゲットドメインのものを表わす手段である。筆者ももちろんそのような理解でこれらの言葉を用いるが、筆者はその定義をさらに拡大して、オノマトペの用いられ方や、オノマトペをいわばマナーとして語幹に含んだ動詞や、マナーを動詞の形態的あるいは語彙的変化で動詞の中に取り込んでいるような場合も、説明的でないという意味で隠喩的と考えている。詳しくは以下で各現象について論じるが、そのような拡大的な捉え方をすることがフランス語の一般的な性格を理解する上で非常に有効であるというのが筆者の考えである。

2. 物の命名における隠喩性について

物の命名において、たとえば日本語の「メロンパン」という名前には「〜のような、〜に似た」のような説明の言葉はないが、ソースドメインの表現「メロン」と「パン」を並置する構造を取ることで、日本語話者には「色、形あるいは味がメロンに似たパン」という理解がなされる。日本語は「A のような B」と言う場合、通常 AB という構造を取る。この AB という命名の形式は直喩的な命名である。一方、フランス語では「三日月 croissant のような形をしたパン」と言う場合、ソースドメインの croissant「三日月」という表現をそのままターゲットドメインのもの、つまりパンの一種であるクロワッサンを表わすのに用いるのである。このような命名はまさに隠喩的命名である。

このフランス語の隠喩的命名は、フランス語の語彙の多義性と密接に関係している。

(1) Les *camemberts* sont souvent utilisés en économie et en finance. (Vikidia)

(2) Comment se forment les *moutons* sous nos meubles ?[1]

(3) J'ai trouvé une *coquille* dans la dernière page.

上記の例の中のイタリック体の語は、ある程度フランス語に親しんだ者なら誰もが知っている日常的な語である。しかし、多くの人が最初に覚える意味ではこれらの例は理解できない。(1)は「円グラフ」、(2)は「綿ぼこり」、(3)は「誤植、ミスプリント」という意味である。(1)が「カマンベールのような形をしたグラフ」という比喩的意味拡張であることはすぐに理解できる。説明的な graphique (diagramme) en forme de camembert という表現もあるが、文脈があれば camembert で十分である[2]。(2)は羊と綿ぼこりではサイズの違いが大きいが、フワフワした印象が似ているのでこの比喩的意味拡張も感覚的に納得できる。(3)の貝殻、殻を表わす語が誤植を意味するようになった経緯については複数の説があるものの、いずれも確かではない[3]。経緯が明らかでない(3)も含めていずれも形式的には隠喩的命名であり、結果的にこれらの語は多義語となっている。

(1)~(3)はよく知られた意味が出発点となって例文にあるような比喩的な意味拡張が起こったのであったが、逆によく知られた意味が意味拡張の結果である場合も存在する。

(4) « Il m'a tapée. C'est un *maquereau*. » (Camus：*l'étranger*)

「あいつは私を叩いたの。あいつはポン引きよ。」

maquereau はもともと「ブローカー、仲介人」を意味していたが、次第に「売春宿のオーナー」→「ひも、ポン引き」と意味が変化した。こちらの領域（何らかの役割を持つ人）の意味が原義で、そこから学習者が最初に覚える意味である魚の領域の「鯖」へと意味が拡張されたものであるが、この意味拡張の経緯もよく分かっていない[4]。

(3)や(4)のように意味拡張の経緯が明らかでない場合もあるが、これらの例も何らかの比喩的な意味拡張により意味が定着したものであり、形式として隠喩的な命名と考えられる。

3. 形式としての隠喩的命名、直喩的命名

先に、日本語は「A のような B」と言う場合、通常 AB という形式を取り、フランス語では直接的に A という形式を取ると述べた。日本語が AB と言う形を取った場合、基本的に A と B の間には類似性、近接性（メトニミー）という比喩的関係があるが、結局、A で B を説明して特定していると考えられる。

たとえば日本語の「桜餅」は餅が桜色をしており、また桜の葉に包まれている。色は桜に似ているが、桜の葉に包まれている点は「～のような、～に似た」という関係ではなく桜の葉との近接性、メトニミーの関係である。このような AB 型の命名形式は、カテゴリーを表

---

1 ネットからの例や作例については出典は省略する。

2 graphique circulaire という表現もあるが、camembert の方が視覚に訴えて表現としてインパクトが強い。

3 歴史的経緯は別として、個人的には卵を使った料理の中に卵の殻の小さなかけらが入っているのに気付いたときの不快感と、ページの中に誤植（小さな瑕疵）を見つけたときの感覚が対応するので納得できる。

4 この中世オランダ語起源の語の意味拡張については、鯖が鰊の群れに付いて泳ぐので結果的に鰊の雌と雄が近づくことになるという俗説に原義との類似点を見たものであるという説があるが、Rey(2010)には「鯖」という意味の出現に比べてこの俗説が比較的新しいものであるのでこの説は成立し難いと記されている。

わす B に A を前置することで特定の B であることを理解させるという働きをしている。A と B の間に比喩的関係がなくとも A が B を特定する役割を果たしていれば、そのような場合も筆者は広く直喩的命名と考える。一方、フランス語はカテゴリーを表わす B を言わずに A で B を表わすことが多いのだが、その場合、A に対する類似性だけでなくやはり近接性による場合もある。いずれにしろカテゴリーを表わす B がないだけに、それが何を意味するのか、どのような領域のものなのかは文脈や聞き手の知識に依存するところが大きい。たとえば religieuse という語を聞いても、実際に色と形が「修道女」を思わせるケーキを前にしているか、既にその名前を知っていなければエクレアの一種だとは分からない。

フランス語の隠喩的命名がどのような領域に多く見られるかについては春木(2017, 2021)をご覧いただきたいが、少し分かりにくい場合を補足説明しておきたい。

たとえばフランス軍の主力戦闘機 Rafale「突風」やミサイル Exocet「飛び魚」[5]の場合は隠喩的命名だが、アーサー王伝説に出てくる剣は Excalibur であり、『ロランの歌』でロランが持っている剣は Durandal と固有名詞的である。一方、日本語では剣には「山姥切」のように「〜丸、〜剣、〜切」という刀であることを示す表現が付く[6]。A の部分はその刀の言われ（「これこれの時に使われた／これこれのために使われた刀」というような伝説や言い伝え）を表わすが、これも広くメトニミーの関係と捉えることができる。フランス語の Durandal のような場合は固有名詞的な表現の中にいわば「〜剣」のような部分が取り込まれているという意味で形式的には隠喩的命名と考えたい。

カテゴリー名を用いないというのは舟の場合にも見られる。日本語では舟は「〜丸、〜号」という形式を取るが、フランス語などではよく知られた、あるいは身近な人名や地名をそのまま舟の名前として用いる場合も多い。たとえば Le Charles de Gaulle「空母シャルル・ド・ゴール」は元大統領のシャルル・ド・ゴールを記念しての名付けであるが、このような場合、多少ともその人物や地名のイメージが想起されるという意味では比喩的ということもできるかも知れない。いずれにしろ命名の形式としては隠喩的である。

フランス語では人名がそのまま、あるいは多少の語尾変化を伴なって物の名前として使われている場合がよくある：poubelle「ゴミ容器」(←Eugène Poubelle)、guillotine「ギロチン」(←Joseph Guillotin)、braille「点字」(←L. Braille)、mansarde「屋根裏部屋」(←F. Mansart)。これらはその物を発明・考案した人、あるいはその物を好んだ人の名前が元になっている。日本語なら「プベル式ゴミ容器」のような説明的な命名形式になるところであるが、フランス語では隠喩的命名形式を取っている。この場合もメトニミー的関係と考えることができる。

4，マナーとオノマトペ

5 「飛び魚」の場合の発音は[ɛgzɔsɛ]だが、ミサイルの場合は[ɛgzɔsɛt]と語末子音を発音する。

6 春木(2017)でも述べたように、「鉋切長光」のように刀工の名前が付く場合もあるが、これは刀工がメトニミー的に刀を表わしているので、「〜剣」という形式と同じである。

4. 1. 発話とオノマトペの関係

日本語ではオノマトペは漫画の中や間投詞的な場合をのぞき、オノマトペ単独ではなく、常に「～（と）／（という）音をたてる」、「～（と）いう」、「～（と）鳴く」のように引用的に用いられる。この引用表現「～と／～という」の部分は、「～のような／～のように」と言い換えることができるが、実際の音をその言語の音的制限の中で可能なオノマトペに比定しているわけであり、直喩的表現と考えることができる。

フランス語ではオノマトペを文内で用いるには制限が多い。先ず「～という音をたてる」という意味の動詞（faire など）、あるいは「～という音が聞こえる」という意味の動詞（entendre など）の目的語にオノマトペを用いることができる。このような場合、春木(2013)で見たようにオノマトペは限定詞を伴なわないことが多く、また引用符が付いていたりイタリックになっている場合も多い。つまり目的語のスロットにあるものの、オノマトペは間投詞的に直接引用されていると考えられる[7]。日本語の場合を間接話法的とするとフランス語の場合は直接話法的なのである。言い換えればフランス語のオノマトペは品詞的に名詞としては未成熟なのである。従って主語として用いられる場合も限られるが、主語の場合は主語の意味論的な性格上、目的語の場合よりも何らかの限定詞が付くことが多い。

(4) (...) mes pas font *top top top* dans le silence de la ruelle, (...)

(P. Delabroy-Allard, *Qui sait.*：134)

「私の足音が静かな路地でパタパタパタと音をたてた」

(5) J'entends *clic-clac*. Quelqu'un a fermé la porte du 3ème étage.

「カチリカチリと音がした（←カチリカチリという音が聞こえた）。誰かが 4 階の扉を閉めたのだ」

(6) *Un clic* s'entend dans l'ordinateur.「コンピュータの中でカチッという音がした」

(7) Dans la maison de retraite, *le ronron de minou* est considéré comme un antidépresseur.[8]

「退職者ホームでは猫がゴロゴロと喉をならす音は抗鬱効果があると考えられている」

以上はオノマトペそのものが持つ直喩的、隠喩的性格についてであったが、フランス語の隠喩的性格が前面に出てくるもう一つの場合はマナーとしてのオノマトペのありようである。フランス語の場合、オノマトペは辞書ではオノマトペ、あるいは間投詞と記されており、ronron など一部のオノマトペについては名詞とも記されている。一方、日本語の場合は辞書ではオノマトペは副詞と表記されている[9]。

日本語ではオノマトペは引用形式を伴なってかなり自由に文中にマナー表現として用い

---

[7] このような場合の限定詞の有無、繰り返し、複数の s の有無などについては春木(2012, 2013)などを参照されたい。

[8] この例の ronron はオノマトペ（起源）ではあるが、名詞としてかなり安定しており単に「猫が喉を鳴らす音」と訳す方が適切かもしれない。

[9] オノマトペそのものがマナーを表わすと考えれば副詞という表記にも根拠があるとも言えるが、文中では少なくとも「と」という引用マーカーを用いなければ非文になる（「*戸がバタン閉まった」）ので、オノマトペそのものは＜オノマトペ＞（あるいは＜間投詞＞）と表記すべきである。（「ゴロゴロ転がる」のように「と」がない場合も「と」を補えるので、「と」が省略されたものと考えるべきである。特に繰り返し形式の後では「と」を省略しやすい。）

ることができる。一方、フランス語では文の中でマナーを表わす構成要素としてオノマトペを副詞的に用いることは難しい。これについては春木(2020)でも考察したが、結局日本語のオノマトペが引用形式を伴なった直喩的形式で副詞化されることにより、文中の構成要素として働くことができるのに対して、フランス語のオノマトペはあくまでも隠喩的に現実の音に関連づけられる間投詞であり、原則として文頭または文末に遊離されて同格的に発話内容を説明する形でしか用いることはできない。動詞の直後、つまり文内に置かれているように見える場合も、一般的にカンマで挟まれたりイタリックになっていて挿入的である。あくまでも文の構成要素ではないのである。

(8) Mais dans la cuisine, il y a ce robinet qui goutte dans l'évier, *ploc, ploc*, (...)
(L. Mauvignier, *Continuer.*：61)
「しかし台所では蛇口から流しにポトンポトンと水が落ちていた」（原文イタリック）

(9) Je dis, Attention Garva, ne va pas te prononcer trop fort contre l'ordre établi parce que *pan pan* on te descendra. (A. Saumont, *La terre est à nous.*：136)
「(...)　だって、言い過ぎたらパンパーンと（銃で）やられてしまうよ」

(10) (...) le four se referme *clac* sur feu la feuille. (P. Gautier, *Mercredi.*：30)
「かまどのような口はカチッと可哀想なサラダ菜の葉の上で閉じた」

(11) (...) le fleuve se fout des poils, il trouve le chemin, ça descend sur les chevilles, ça s'arrête à la malléole et de là, ça goutte, *ploc, ploc*, sur le sol.
(P. Delabroy-Allard, *Qui sait.*：144)
「(メンスの) 血の流れは恥毛を無視して道を見つけ、足首まで降りていき、くるぶしのところで止まって、そこから床にポトポト（と）落ちていく」

(10) はオノマトペが副詞のようにカンマなしで動詞の後に挿入された稀な例である。(11) はオノマトペがカンマで前後から切り離されてはいるが、かなり自然に読める例である。通常であれば clac や ploc, ploc は文末に置かれて同格的に文内容を補足するところであるが、目的語を取らない再帰構文の自発的用法や自動詞の場合は、動詞の直後にオノマトペを副詞的に挿入しやすいと考えられる。いずれにしろ(10)(11)のようなケースはかなり稀である。

4. 2. オノマトペ動詞

以上のように、日本語とは違ってオノマトペを文中で副詞的に用いにくいフランス語では、音に関係するマナーを表わす手段として、オノマトペを動詞の中に取り込んだオノマトペ動詞が存在する。この場合、オノマトペ的な部分が動詞の中に取り込まれているという点で隠喩的である。この種のオノマトペ動詞にはいくつかのタイプが存在する。

先ず既存のオノマトペを動詞化した以下のような動詞がある[10]。

glouglou → glouglouter「(液体が) ゴボゴボ／ドクドク／とくとくと音をたてる」
froufrou → froufrouter「(布、葉叢、小川、羽などが) サラサラと音をたてる」

[10] オノマトペ動詞からオノマトペが逆方向に派生した場合も存在する。vrombir「(虫が) ブンブン言う、(エンジン・機械が) うなる」→ vroum「エンジンがたてるブルンブルンという音」。

ronron → ronronner「(猫が) 喉をゴロゴロ鳴らす」

crac → craquer[11]「きしむ、(乾いた音をたてて) 裂ける」、se craqueler「罅がはいる」

不定詞語尾-er を付けるために子音 (字) の添加や変化があっても、元のオノマトペが明白に透けて見える場合である。ただしこのタイプは意外に少数であり、生産的ではない。このタイプに関連して非常に興味深いのが以下の例である。

(12) (...) le sang qui *ploc ploc* sur le sol (...)　　(P. Delabroy-Allard, *Qui sait.*：146)

これは例(11)« ça (=血) goutte, *ploc, ploc*, sur le sol » の少し後の部分で主人公が同じことを述べている部分である。例(11)では挿入的に用いられているオノマトペ ploc, ploc が例(12)では繰り返しの形そのままで動詞として用いられている。もちろんフランス語にはそのような動詞は存在しない。一時的、個人的にいわば力業で作られた動詞であり、動詞の活用および綴り字と発音との関係からはあり得ない形である[12]。しかしここではごく自然に受容できてしまう。動詞 goutter「したたる」の意味は、本来は goutter のマナーを表わしていた ploc ploc の中に取り込まれているのである。これはまさに隠喩的な表現方法である。

次に、何らかのオノマトペから作られたのではないが、起源的にはオノマトペ的な語根から作られたと考えられる動詞のタイプがある。これには、一定の子音 (群) や唇音のように一定の素性を持った子音 (群) が特定の領域の音を表わしやすいといった音象徴の問題も絡んでくる。

grommeler「ブツブツ言う」、grogner「ぶつぶつぼやく」、gargouiller「(水が) ゴボゴボと音をたてる」; frémir「震える、軽い音をたてて揺れる」、frissonner「震える、揺れる、そよぐ」; susurrer「ささやく」、murmurer「ささやく」

また鳥や動物の鳴き声も日本語の直喩的な「～と鳴く」式とは異なり、一般にオノマトペ的な動詞そのもので表わされる隠喩的な形を取り、その数は非常に多い。

beugler, meugler, mugir「牛がモーと鳴く」、boubouler「フクロウがホーホーと鳴く」、coasser「蛙がクワックワッと鳴く」、piailler, piauler, pépier, piauter「鳥がピイピイと鳴く」、nasiller「アヒルがガアガアと鳴く」

5. 音以外のマナーと動詞

5. 1. 動詞接尾辞による場合

4 では音に関するマナーについて見たが、フランス語では音以外のマナーも基本となる動詞の語形変化で表わす場合がある。ここで取り上げるのは接尾辞が付加されてベースとなる動詞の意味が変化するタイプである。この意味の変化はベースの動詞の意味になんらかのマナーが添加されたことによる。いくつか例を挙げる。

boire「飲む」 → buvoter「(酒を)ちびりちびり飲む」
　　beuvailler「(酒を) 何度も飲む」

[11] craquer は「挫折する、失敗する」など抽象的な意味で用いられることも多い。

[12] もしも ploc から動詞を作るとすると不定詞は ploquer、現在形 3 人称単数は ploque となる。

manger「食べる」→ mangeailler「少し食べる、つまむ」
mangeotter「ちびちび食べる、(食欲がなく) いやいや食べる」
discuter「議論する」→ discutailler「つまらないことを長々と／たびたび議論する」
dormir「眠る」 → dormasser「眠る (軽侮的)、い眠る」
dormichonner「少し眠る」、dormoter「少し眠る」
dormailler「眠りが浅い、途切れ途切れに眠る」
gratter「引っかく、かき削る」→ gratouiller「軽く引っかく、軽く削る」
rêver「夢を見る」→ rêvasser「ぼんやりと夢想にふける、(深く眠れずに) いろいろな夢を見る」
rimer 「詩を作る」→ rimailler「下手な詩を作る」
sauter「跳ぶ」 → sautiller「ぴょんぴょん跳ぶ、跳ね回る」
tirer「引っ張る」→ tirailler「いろんな方向に何度も引っ張る」
traîner「うろつく、ぶらつく」→ traînasser, traînailler「うろつく、ぐずぐずする」
travailler「仕事をする」→ travailloter「適当に働く」
vivre「暮らす」→ vivoter「細々と暮らす、かろうじて生きる」,
voler「飛ぶ」 → voleter「ひらひら飛びまわる、はためく」

日本語訳からも分かるように、日本語ではベースとなる動詞に副詞やオノマトペ副詞をつけて表わすところを、フランス語では接尾辞を付けるという語形変化で表わしている。これは形式的には隠喩的語形成と考えることができる。

この種の動詞の数は多いが、位相的には話し言葉で用いられるものが多く、時にはかなりくだけた話し言葉と考えられるものもある。取り出せる接尾辞としては-ot(t)er[13], -ailler, -ouiller, -iller, -asser, -onner, -iner などがある。これらの動詞接尾辞はざっと見渡すと縮小、反復、無目的性、試みなどのニュアンスを表わしている場合が多いが、実際にはそれぞれの動詞によってニュアンスは様々である。これらのマナーを含む派生動詞によく見られる意味を、先行研究を参考にしてまとめておこう[14]。

1) 何らかの縮小を表わす(dimunitif)
mangeailler「(何度も) 少し食べる、つまむ」、s'amusoter「つまらないことに興じる (対象の矮小化)」、pleuviner「小雨が降る」
2) 事態の反復を表わす(itératif)[15]
buvoter「ちびりちびり飲む」、sautiller「ぴょんぴょん跳ぶ、跳ね回る」
3) 明瞭な目標がなく事態が離散することを表わす(incassatif)
courailler「あちこち走り回る、放蕩する」、tirailler「いろんな方向に何度も引っ張る」
4) 事態の遂行において熱意に欠けることを表わす(tentatif)

---

13 -ot(t)er には voleter「飛び回る」のように-eter という形もあったが、現在は-ot(t)er が優勢である。

14 ここでは Stosic et Amiot(2011)を参考にしているが、著者達の分類システムとは必ずしも一致していない。括弧の中の用語は Stosic et Amiot(2011)による。

15 refaire に見られるような「繰り返し」répétition と「反復」は異なる。

écrivasser「書きなぐる、ぞんざいに書く」、travailloter「適当に仕事をする」

5) 目指す結果に至らない事態を表わす(conatif)

nageoter「ちょっと泳ぐ、泳ぎにくそうに泳ぐ」、marchoter「ぎこちなく歩く、歩こうとする」

実際には幾つかの意味が重なっていることも多く、また上に挙げたような意味に軽侮的(dépréciatif, péjoratif)なニュアンスが重なる場合も多い。たとえば rimailler「下手な詩を作る」は rimer 「詩を作る」に軽侮的なマナーが付加されたわかりやすい例であるが、marchoter が幼児や病人の歩こうとする姿を描写する場合には軽侮的なニュアンスはない。(1)と(2)のニュアンスは重なることも多い。事態が反復される場合、事態そのものが細分化されて事態のスケールが小さくなり、事態に対象がある場合はその対象、もしくは事態を担うもの（たとえば「雨」）が量的に小さくなる。(3)(4)(5)のニュアンスも文脈によっては重なり合ったり解釈が入れ替わる場合がある。また traîner と traînasser のようにベースの動詞と派生動詞の意味がほとんど同じ場合は、派生動詞がより口語的であるという位相の違いになるが、これも広くマナーの付加と考えることができる。いずれにしろ、オノマトペ動詞の場合と同じくマナーを動詞の中に取り込んで表わしているという点で隠喩的な表現方法をとっている。

フランス語の派生動詞につけた訳からも分かるように、日本語はマナーを動詞の外に出して説明的、つまり直喩的に表わすのが一般的である[16]。

5．2．動詞語彙そのものによる場合

接尾辞添加のような語形変化ではなく、語彙そのものによって基本となる動詞の意味にマナーを加えた意味を表わす動詞がフランス語には数多く存在する。オノマトペ動詞や接尾辞を取る動詞と同様、マナーを含んだ隠喩的表現方策である。

春木(2017)でも挙げたが、たとえば manger を基本の動詞として考えると食べ方のマナーを含んだ「～食べる」型の意味を持つ動詞が数多く存在する。先ず manger のくだけた日常語として bouffer がある。この場合は位相の違いである。croquer は「バリバリ／かりかり食べる、かじる」と日本語ならばオノマトペを用いて表わすマナーを含んでいる。grignoter は「軽く食べる、少しずつかじる」[17]。さらに pignocher「少しずつまずそうに食べる」、chipoter「(一口ずつ) いやいや食べる」[18]、savourer「味わって食べる」、ripailler「ごちそうをたらふく食べる」、se régaler「おいしいものを食べる」などがある。「たらふく食べる、むさぼる」という意味の動詞は、(se) goinfrer、(se) bâfrer、licher、boustifailler[19]などその数は 10 を超える。

笑い方や泣き方のマナーを含む動詞も多い。春木(2017)でも挙げたが「笑う」については

16 日本語にも「どつく」「すっ飛ぶ」などのように程度の高さというマナーを表わす動詞接頭辞が若干存在する。

17 grignoter は接尾辞-oter が付いているが、grigner とは現代フランス語では意味の上でペアの関係にはない。

18 chipoter も接尾辞-oter が付いているが、chiper をベースとせず、古期フランス語の名詞 chipe「小片」からの形成。

19 boustifailler は動詞接尾辞-ailler とは無関係。

基本となる動詞は rire, rigoler（日常語）である。sourire「ほほえむ」、glousser「くっくっと笑う」、ricaner「冷笑する、せせら笑う」、rioter「薄ら笑いを浮かべる」[20]とそれぞれ笑い方のニュアンスを表わす。s'esclaffer「どっと笑う」、se bidonner「腹をかかえて笑う」など「爆笑する」に対応する動詞も se marrer、se gondoler、se poiler のように話し言葉に多く見られる。「爆笑する」と訳せる表現の中には se fendre la pêche、se fendre la pipe、se fendre la gueule、se poiler la gueule など再帰構文の熟語的表現も多いが、これらも目的語がマナーを表わしているのではなく、動詞句全体がマナーを含んだ「笑う」＝「爆笑する」という意味を表わしているので動詞だけの場合と同列に扱うことができる。

他にも何らかの発言や声を出すことに関する動詞の領域などを思い起こしてもらえれば、フランス語には様態を含んだ様々な動詞があることが理解できるだろう。

日本語にも「爆笑する」「冷笑する」のように「漢語＋する」という形式や「ほほえむ」「がっつく」のようにマナーを含んだ動詞もあるが、フランス語と比べた場合、本来の日本語にはこのタイプの動詞は比較的に少ないと考えられる。日本語ではマナーは基本的に動詞の外で説明的に表現されるのである。

6. 結論に代えて

本稿で見てきたようにフランス語では様々な現象において直接的な隠喩的表現が好まれる。一方日本語では説明的な直喩的表現が好まれる。もちろんいずれの言語においても例外は存在するが、それは主要な傾向から逸脱することによって何らかの効果を目指しているものであると説明できる場合が多い。

命名のところで見たように、隠喩的命名の結果としてフランス語には多義語が多い。これは別の見方をすればフランス語の名詞の意味が多かれ少なかれ抽象的であるということである。バゲットや指揮棒、箸などの意味を持つ baguette のスキーマ的な意味、つまりすべての用法に共通する意味は「細長いもの」という抽象的レベルでの意味になる。フランス語では食用となる動物とその動物の肉は同じ単語で表わされる。たとえば mouton は「羊（食用となる雄羊）」でありまた「羊の肉」でもある[21]。一方、英語では「羊」は sheep で、「羊の肉」はフランス語からの借用語 mutton と別の単語で表わされている[22]。さらに言えば「羊の毛皮」sheepskin もフランス語では mouton である[23]。バゲットの場合ほど抽象的ではないものの、「羊」とメトニミー的につながるものをすべて mouton と呼ぶところから mouton のスキーマ的な意味は英語や日本語と比べれば具象性が希薄であり、やはり多少は抽象的と言うことができる。このような場合も、mouton「羊」を基本として隠喩的な意味拡張が

---

[20] rioter は rire をベースとする接尾辞-oter のタイプになる。「笑う」という事態の強度 intensité の弱化と考えられる。

[21] もちろんフランス語では非可算名詞の食用肉の場合は部分冠詞が付くという違いがあるが、ここでは触れない。

[22] 英語で動物と肉を別の語で呼んでいるのはノルマンの征服以降に存在したフランス語を話す支配階級と英語を話す一般人との間の社会的 2 言語併用状態が関係しているのかもしれない。

[23] 日本語では「羊」、「マトン」、そして毛皮の場合は「ムートン」と区別される。

起こった結果と考えることができる。

4.や 5.で扱った現象は、結局はフランス語におけるマナーの表わし方、動詞とマナーの関わり方という問題につながるものである。フランス語でももちろん動詞外の要素（副詞、前置詞句、ジェロンディフなど）によってマナーを表わすこともできるが、日本語などに比べるとマナーを動詞の中に取り込んでいる場合が多いのがその特徴である。そのような場合を本稿ではフランス語の隠喩的な性格の現われと考えた。

また接尾辞による動詞群に関しては、ベースの動詞が表わす典型的な事態から何らかの意味で逸脱している事態を表わしているので、そこには当然、その逸脱した事態に対する評価が含まれていることが多く、言語における評価の表わし方という問題にもつながる。

本稿では命名形式における直喩的、隠喩的という捉え方を、表現形式として説明的か直接的かという観点で捉え直し、それをフランス語におけるオノマトペの用法や動詞に見られる現象にまで広げて適用した。比喩という観点からは批判もあるかと思われるが、このような捉え方をすることで、日本語などと比較した場合にフランス語に特徴的であると考えられる現象を統一的に説明できるというのが筆者の主張である。

参考文献

Enckell, P. et P. Rézeau (2003) *Dictionnaire des onomatopées*. Paris, PUF.

Moline, E. et D. Stosic (2016) *L'expression de la manière en français*. Paris, Ophrys.

Rey, Alain (sous la direction d') (2010) *Dictionnarire historique de la langue française.* Paris, Le Robert.

Stosic, D. et D. Amiot (2011) « Quand la morphologie fait des manières : les verbes évaluatifs et l'expression de la manière en français » D. Amiot, W. De Mulder, E. Moline et D. Stosic (éds), *Ars Grammatica.* Bern, Peter Lang : 403-430.

川口順二（1998)「動物名から道具名へーメトニミ、メタファ、意味の変化ー」藝文研究 75 : 112-127.（慶應義塾大学藝文学会）

川口順二（1999)「ふたたび動物名をめぐって」藝文研究 77 : 362-376.（慶應義塾大学藝文学会）

春木仁孝（2012)「フランス語におけるオノマトペ効果について」『川口順二教授退任記念論文集』pp.25-38（ウェブ出版: https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-01511628 および冊子体の私家版）

春木仁孝（2013）「フランス語のオノマトペ ーオノマトペの名詞性を中心にー」『時空と認知の言語学』II : 49-58.（言語文化共同研究プロジェクト 2012、大阪大学大学院言語文化研究科）

春木仁孝（2017）「直喩的な日本語、隠喩的なフランス語」『時空と認知の言語学』VI : 31-40.（言語文化共同研究プロジェクト 2016、大阪大学大学院言語文化研究科）

春木仁孝（2020)「現代フランス語のオノマトペと構文」『Correspondances コレスポンダンス』、朝日出版社 : 775-787.

春木仁孝（2021)『フランス語の発想　日本語の発想との比較を通して』、朝日出版社、180p.